

「家族する」時代のボランティアな共同体家族 子ども食堂から見た家族形態の多様化

牛島佳代、成 元哲

伝統的な家族と子ども食堂での家族の団らん

■伝統的な家族観

「家族と聞いてどのようなイメージが浮かびますか。あなたのイメージを絵で表してみてください」。これは、毎年、私が家族社会学の講義冒頭で学生に要求する課題である。唐突な質問に学生は戸惑いながらも熱心に描き上げた絵の一部が図 1 である。それぞれ力作であるが、2018 年度の受講生 92 名中 79 名（85.9%）の学生が夫婦と未婚の子どもの核家族世帯を、次に 10 名（10.9%）の学生が祖父母と夫婦、未婚の子どもの三世帯家族を描いている。

また、家族構成員は互いに手をつないだり、笑顔で食卓を囲んだりする様子が描かれている。両親や祖父母に囲まれ、愛情に包まれながら心身ともに健やかに成長する子ども達というのが、学生がイメージする家族像である。こうした学生が持つ家族イメージは、伝統的な家族観、すなわち、保守的な家族像である。

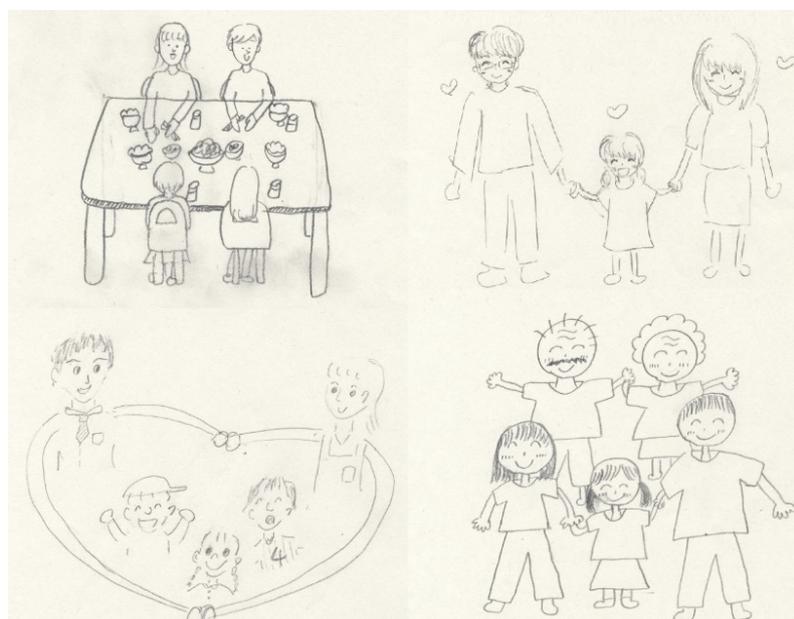


図 1 学生が描いた家族のイメージ図

■子ども食堂での家族の団らん

一方、子どもの孤立や貧困が社会問題となる中で、地域のボランティアが子どもたちに無

料又は安価で食事や家族の団らんを提供する活動を行う子ども食堂が急増している。子ども食堂は学校や家庭に加えて、地域でもう一つの居場所を作ろうとする民間発の試みとして、2012年に東京都大田区で始まった。その後、子どもから高齢者までさまざまな世代がつながり、全国で多様な形の子ども食堂が誕生している。子ども食堂では、対象を限定せず、地域に開かれ、食事だけでなく、家族の団らんや季節の行事など様々な体験を提供し、地域の人が子どもたちと交流している。朝日新聞の調査によると、子ども食堂は2016年5月に全国で319カ所あり、その後、2018年3月には全国で2200カ所以上存在している²⁾。2010年代の日本社会は空前の盛り上がりを見せる子ども食堂で家族の団らんを体験する時代を迎えている。

■子ども食堂の急増が示す社会状況、家族の変化とは

血縁でつながった伝統的な家族観が学生たちに支持される一方、見知らぬ子どもから子育て中の母親や妊婦、高齢者までが集い、家族機能のシンボルのような「食」を共にする子ども食堂が全国各地で急増している。こうした不思議な現象は、どのような社会状況を映し出し、また家族をめぐる変化の兆しを指し示しているのか。

経済より人口動態や家族構造を軸に社会や歴史の変化を捉えるフランスの家族人類学者エマニュエル・トッドは、家族形態こそが社会の価値観を生み出すと主張する。彼は『世界の多様性』という著作³⁾で、世界の家族制度を分類し、大胆に家族型と社会の関係を示した。本稿では、トッドの立論に示唆を得て、家族をめぐる人口動態と子ども食堂急増から、現代社会において家族とは何か、家族の多様化が示唆する社会の変化について検討してみたい。

「近代家族」の衰退と家族形態の多様化

■近代家族の一般化

家族は、諸制度や産業構造、人々の価値観などと相互に影響を受け合いながら、さまざまな形態を見せてきた。深い情緒的な絆と信頼関係で結ばれた夫婦とその子どもという核家族の形態は、近代化の過程において、欧米諸国では18世紀後半から19世紀にかけて登場した「近代家族」と呼ばれる家族形態であることは広く知られている。

落合恵美子によれば、日本において、「近代家族」が一般化してくるのは戦後の特に1955年から1975年までの高度経済成長期に相当する時期である⁴⁾。落合は、近代家族の特徴として表の8つを挙げている⁵⁾。①家内領域と公共領域との分離、②家族構成員相互の強い情緒的關係、③子ども中心主義、④男は公共領域・女は家内領域という性別役割分業、⑤家族の集団性の強化、⑥社交の衰退、⑦非親族の排除、⑧核家族、である。本学の学生の多くが描いた家族像は、この「近代家族」の姿を体現したものと言える。

■近代家族の変化

ところが、バブルが崩壊した1990年代後半以降、「近代家族」は様々な変化を遂げてい

る。

○世帯構造の変化

第一に、世帯構造の変化である。世帯構造別にみた世帯数の構成割合の年次推移では、1986年では「夫婦と未婚の子のみの夫婦世帯」は41.4%であったが、その割合は年々減少し2016年には29.5%と3割を下回っている（図2）。同様に、「三世帯家族」の割合は15.3%から5.9%に減少している。一方、その間に増加しているのは「単身世帯」と「夫婦のみの世帯」である。これは、長寿社会における高齢者のみの世帯の増加も意味している。

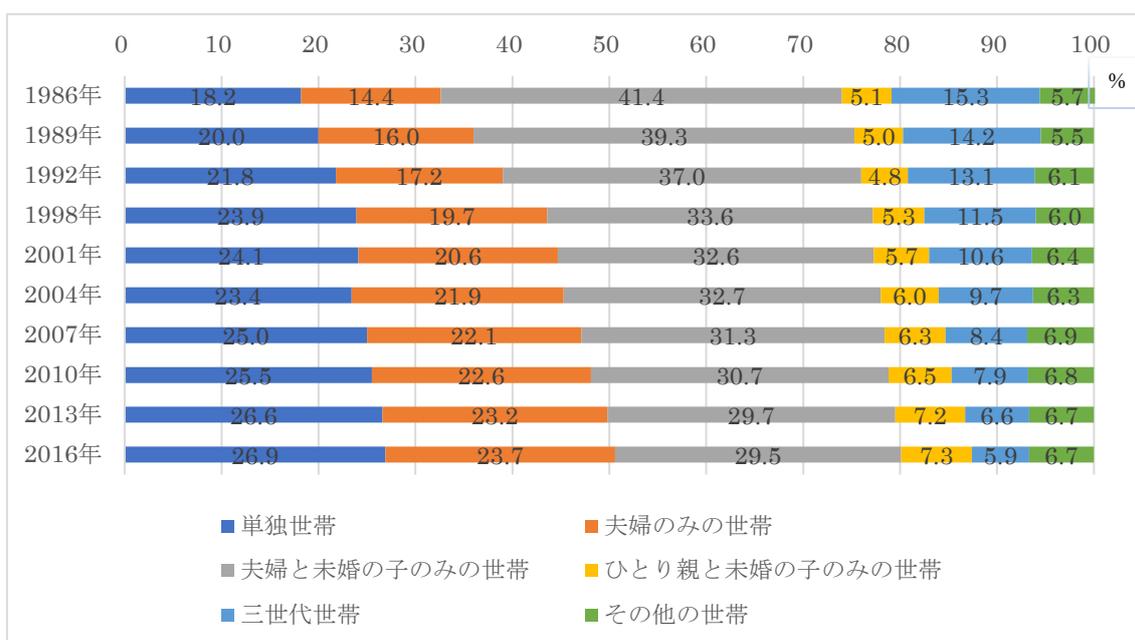


図2 世帯構成別にみた世帯数の構成割合の年次推移

出所：厚生労働省政策統括局：グラフでみる世帯の状況 平成30年国民生活基礎調査（平成28年）の結果から、2016

○夫婦共働き家庭の増加

第二に、夫婦共働き家庭の増加である。1980年には、男性世帯雇用者と無業の妻（いわゆる専業主婦）からなる世帯が1,114万世帯であったのに対して、雇用者の共働き世帯が614万世帯であった。しかし、雇用者の共働き世帯は増加を続ける一方で男性雇用者と無業の妻からなる世帯は減少を続け、1990年代に雇用者の共働き世帯が男性雇用者と無業の妻からなる世帯を上回った。

さらにその差は年を追うごとに拡大してきている。「近代家族」では、性別役割分業のもと女性は専業主婦となり、家事・育児を専門に行うことが規範化されていた。ところが、1990年代初頭のバブル崩壊後、雇用の不安定性が増し、非正規雇用の増大などによって、家計を補うための主婦の労働が増えたこと、短時間労働や配偶者の扶養範囲内での雇用など主婦が働きやすい環境となったこと、性別役割分業に捕われない生き方が社会的にも広く受け入れられてきたことなどが背景となり、共働き家庭が増加していったと考えられる。

○一人暮らしの人の台頭

第三に、一人暮らしの人、シングルトンの台頭があり、その割合は全世界で急上昇している⁶⁾。高齢者の単身世帯が増加してきたことは先述したが、単身世帯の増加は高齢者に限ったことではない。

50歳時点で一度も結婚したことがない人の割合を「生涯未婚率」というが、1990年以降この数値が急激に伸びている。2015年の国勢調査によると男性では23.4%、女性は14.1%と男性の4人に1人、女性の7人に1人が生涯未婚であることが分かった。2035年には、男性の3人に1人、女性の5人に1人が生涯未婚になると推計されている⁷⁾。女性の高学歴化が進み、就業率も高まり、家庭に縛られない自由な生き方を選択する女性が増えたこと、雇用が不安定な中で結婚し家庭を養うことに自信の持てない男性が増えたことなどが理由として考えられる。

○離婚件数の上昇

第四に、離婚件数の上昇である。人口動態統計によれば、1975年の離婚件数は約11.9万件であったが、その後上昇を続け、2002年には約29.0万件となりピークに達する。以降は減少傾向にあるとはいうものの、2016年には約21.7万件と75年当時に比べ約1.8倍になっている。それに伴い、親が離婚した未成年の子どもの数も増加している。このように家族形態が変化する中で、親との死別も含め、ひとり親家庭への支援ニーズが高まっている。

○児童虐待の増加

第五に、児童虐待の増加である。全国の児童相談所（児相）が2016年度に対応した児童虐待の件数は前年度比18.7%増の12万2578件で、過去最多を更新した。1990年度の集計開始以来、26年連続で増加している。警察が児相への通報を徹底するようになったこと、国民が虐待についての意識を高めたことなどが、増加の要因とみられている。しかし、近代家族形成の過程において失われた社交の衰退、すなわち家族外である地縁などとの関係の希薄化により、育児が家族、特に母親にのみ責任を押し付けられたことによるひずみとの見方もある。

○重圧に曝される近代家族

以上、見てきたように、家族は高度経済成長期に「近代家族」として、それまでの古い社会関係である非親族や地縁などの家族外の縁から遮断され、家族の集団性を強化することにより、唯一の心の拠り所としての地位を獲得した。その半面、「近代家族」が一身に担うことになった情緒安定機能、子どもの教育や社会化、病人や高齢者の介護機能等の重圧に曝されることになったのである。

近代家族の相補的關係としてのボランティアな共同体家族

ここで近年の子ども食堂の急増に目を向けてみよう。まず、現代社会において子ども食堂とは何かという問いの背後には「家族とは何か」「地域社会とは何か」という問いが控えている。ここでは暫定的に、今の子ども食堂を家族とそれを取り巻く社会圏が伸縮し交差する状況の中で生み出された社交関係の一形式、すなわち、主にボランティアな主体によって提供される共同体家族であると捉えておこう。

■社交関係の衰退と近代家族の広まり

フランス革命によって打倒された旧体制、アンシャン・レジーム期の子どもと家族生活を描いた『<子ども>の誕生』において、フィリップ・アリエスは「近代では家族意識と古い社交関係のあり方とは相容れないものであり、互いに他方を犠牲にすることでしか発展することができなかった」と指摘していた⁸⁾。さらにアリエスは、15世紀から18世紀にかけて、家族意識が発生し、発達していくが、それは18世紀までは家族意識の発達が旧来の社交関係の組み立て方を崩壊させることがなかったと述べている。

しかし、18世紀以降、近代家族は、社交関係の衰退とともに広まった。それはあたかも、人間が耐えがたい精神的独居からまぬがれることができるように、古い社会関係の衰退の後を引き受けたかのような経過を辿っているのである。

■孤独の問題に対する第三の居場所の重要性

以前は、社会に常に交わり社交関係を築いていくことが、教育や名声、富の源泉であったのに対し、18世紀以降、人びとは社会から身を守り始めた。近代的家族と社交との関係は、レイ・オルデンバーグも、20世紀のアメリカの都市開発が、かつて都市を成り立たせていた本質的な関係を崩壊してしまい、結果として「家庭の役割が肥大細胞のように過剰に膨らんだ」と言っている⁹⁾。

また、アメリカの都市開発の方向性は、個人を<誇り高き独立>と<哀れな孤立>の境目へと押しやりつつあると主張する。そのもとに展開されてきた都市計画が生んだ人々の孤独の問題を批判しつつ、都市生活者に出会いや良好な人間関係を提供し、地域社会を再び活気づけるための第三の居場所として注目するのが、地域に根ざし、長く人々に愛され続けてきた地元のカフェ、本屋、居酒屋、ヘアサロンなどだ。ロバート・パットナムも『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』¹⁰⁾で民主主義と市民参加において、第三の居場所の重要性について論じている。第一の家、第二の職場とともに、「地域社会の中にあるかもしれない楽しい集いの場」、「関係のない人どうしが関わり合う『もう一つのわが家』」、こうした社交の場が第三の居場所である。あらゆる人を受け入れ、近隣住民を団結させる機能を持つ「インフォーマルな公共の集いの場」である。

■近代家族の標準モデルの崩壊危機と第三の居場所の増加

日本においても目下、地域社会の古い社会関係の衰退の後を引き受けたかのように定着した当の近代家族の標準モデルも、少子高齢化や単身世帯の急増などで荒波にもまれ、崩壊の危機に瀕している。家族に子育てや高齢者の介護のすべてを任せる状態ではない社会構造となって久しいが、それに代わる組織やシステムが見出せていない。

近年における高齢者サロンなどの居場所づくり運動、コミュニティカフェ、2010年代の子ども食堂の盛り上がりといった第三の居場所の増加は、こうした社会の変化の一局面を映し出している。

夫婦関係、血縁関係、親族関係、養子縁組などによって出来た人間関係を基礎とした小規模な共同体が家族である。現在、核家族や単身世帯が増え、ひとりひとりの生活リズム

もバラバラになり、孤食化も進んでいる。家族の団らんも失われつつあり、家族団らんを意識的に作り出そうとすることが行われるようになった。家族が自明のように家族の団らんの役割を遂行していた時代が終わりに近づき、それを補うように子ども食堂などの第三の居場所において「家族する」時代を迎えているのである。

社会の変化に向き合い、地域のボランティアによって繰り広げられている地域の第三の居場所づくり運動は、子どもや高齢者の孤立を防ぐ手立ては血縁家族でなくてもよく、子どもを受け入れてくれる地域の人や先生、お兄ちゃん、お姉ちゃんがいることを示している。

信頼できる大人や若者につながったとき、一人の子どもの人生が大きく変わる可能性がある。「地域（のつながり）を変えると、子ども（高齢者）の未来が変わる」ということを示唆しているのではないだろうか。

おわりに

学生が持っている伝統的な家族観ともいえるべき「近代家族」が近頃、家族全体で占める割合が減っており、また、家族の集団性も低下している。一方、子ども食堂というボランティアな共同体家族が台頭していることから、現代家族の多様性を読み取ることができ。現在のところ、子ども食堂は、まだ「名のない関係性」である。ただ、名前がない関係性ではあるが、私たちが今の時代を生きていくために必要な関係性、すなわち、学校でも家でもない第3の居場所と言える。

子ども食堂は、古い社会関係である町内会や老人会、子ども会などの縛りを飛び越えて、地域のボランティアが互いに緩やかにつながり、多様な種類のつながりを混合しながら、重層的につながりを張り巡らす仕組みをさまざまな形でつくっている。子ども食堂のようなボランティアな共同体家族は、これまでの標準的な家族形態にとって代わるものというよりも、相補的關係として捉えたほうがよいだろう。

今後、単身世帯やひとり親家族、ステップファミリーに里親家族、そしてボランティアな共同体家族など家族の多様化はますます進展すると考えられる。地域の住民、行政、福祉関係者及び民間のNPOやボランティアなどが、家族形態の多様化に伴う社会の変化について認識を共有しながら、積極的な連携・協力を図ることが重要である。

文献

- 1) 朝日新聞 2016年7月2日朝刊1面「子ども食堂、300ヶ所超す 貧困・孤食、広がる地域の支援」
- 2) 朝日新聞 2018年4月4日朝刊1面「広がる「子ども食堂」、全国2286ヶ所 2年で7倍超」
- 3) Emmanuel Todd, 1999/荻野文隆(訳):世界の多様性——家族構造と近代性, 2008, 藤原書店
- 4) 落合恵美子 :21世紀家族へ—家族の戦後体制の見かた・超えかた,第3版, 有斐閣, 2004
- 5) 落合恵美子 :近代家族をめぐる言説.井上俊,ほか (著) : 岩波講座 現代社会学<19>家族の社会学, 岩波書店, 1996
- 6) Eric Klinenberg, 2012, 白川貴子 (訳) : シングルトン, 2014, 鳥影社
- 7) 国立社会保障・人口問題研究所:日本の将来推計人口 (平成25年1月推計)

http://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp_zenkoku2017.asp (2018/6/30 確認)

- 8) Philippe Ariès, 1960 : 杉山光信・杉山恵美子(訳) : <子ども> の誕生——アンシャン・レジーム期の子供と家族生活 : みすず書房, 1980
- 9) Ray Oldenburg, 1989 : 忠平美幸(訳) : サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり心地よい場所」, みすず書房, 2013
- 10) Robert David Putnam, 2001 : 柴内康文(訳) : 孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生, 柏書房, 2006